老、恐碌々其無聞、不知天下後世、當以汝爲何等之人ど、是れ衣言氏が小象に題するところ也、俞樾が序に以らく、瑞安孫琴西、予同年友也、其人疎簡寬易、而常有當世之志、戊午歲、天津戒嚴、舉朝爭和戰未決、琴西時以林翰直上書房、兩進封事言甚切、是年夏遂拜出守安慶之命、攜家累出都、因兵阻、迂道吳中、予適寓吳得相見、蓋自別於京師已四年矣と、又曰く、君以一書生、受天子知遇、入史館、直內廷、雖由草茅進、非家父凡伯爲周之世臣者比、然固從中朝卿大夫之後矣、方今天子神聖、朝廷清明、而海疆不靖垂二十年、君預修宣宗成皇常實錄、備知其事本末、又自粵賊踞金陵、蔓延東南數省、爲宵旰憂、而君官京師、聞見尤近、憂時感事之忱、不能自已、而發之於詩と、此數語以て衣言氏が題言の因るところを解すべく、併せて閱歷の一斑を窺ふを得べし。

衣言氏の詩を評すれば、俞樾が、上追漢魏而近作尤似蘇黃といひ、當時既に定說ありきとあれば、必しも贅せざるべし。然も予を以て之を見れば、其作古體に長じ、今體は得意とするところに非ず。其詞の婉麗、其情の悽悲は、梅村の門牆を窺ふに足らざるも、其蒼老は迥かに之に過ぎ、其神韻高華は漁洋を以て語るべからざるも、其沈摯は之にすぐ。世人謂らく清人の詩は康熙乾隆につきたりと、予は衣言の詩の未だ必しも厲袁諸人の下に在らざるを信せむとす。吾國の漢詩を以て此集を視れば、宛然たる蒼海光生遺藁に對するの感や深し。

元史に對する惡評に就て

文學士　簡　內　亘

二十四史中、元史ほど古來惡評を被たりるものはなし。顧炎武は「然則元史之成、雖不出於一時一人、而宋王二公與趙君、亦難免於疎忽之咎矣」（日知錄卷三十六）といひ、四庫全書簡明錄には「其書倉卒而成、最爲草

略、稗誌之語、案牘之文往往不及修改」(陔餘叢考卷十四)(卷五)と貶し、趙翼も亦具さに其舛誤を指摘し、殊に錢大昕の如きは「古今史成之速、未有如元史者、而文之陋劣亦如元史者。蓋史爲傳信之書、時日促迫、則致訂必不審、有草擬而無討論、雖班馬、難以見長、況宋王詞華之士、徵辟諸子、皆自艸澤迂腐、而不暗掌故者乎」(養新錄卷九)と罵り、「故一旦徵入書局、涉獵前史、茫無頭緒、隨手摭拾、無不差謬、偶舉數條、以當笑柄」(同上)と嘲る。隨分思ひ切つたる批評といふべし。如何にもその記事には齟齬も誤脫も重複もあり、殊に全體に於いて統一なきことは、何人にも一見して認め得らるべく、文章の拙劣も蓋し評者の言の如くならん。然れども吾人窃かに思ふ、支那の學者は元史が一年にも足らざる短日月間に成れりとの故を以て、誤謬の多かるべきかを豫想し、特に其瑕瑾の穿鑿に努めたりし結果、元史の不評判が今日の如く甚しきを致せるにはあらざるか。若し他の諸史に就いて同一程度の穿鑿を試みなば、縱令元史ほどにはあらずとも必ず從來思ひ及ばざりし缺點の大に暴露せらるべきを疑はず。委細の考證は之を他日に期することとして、さて錢大昕が「蓋閱六十餘年之久、議論平允、攻稽詳核、前代諸史莫能及也」と激賞したる明史は、果して吾人をして同樣の感あらしむるを得るか。明史編纂の資料たりし皇明實錄以下無數の史籍は概ね現存して吾人の展閲を許す、明史を以て此等に參照するに殆んど何等の用を爲さず、寧ろ明史一篇が與ふる知識は往々にして吾人を迷はしめ、誤らしむるものたるを見るのみ。極言すれば明史は六十年の久しき間に、多數の學者が各々好む所に因りて改竄に改竄を重ね、遂には事實の正僞よりも寧ろ專ら體裁文章の上に注意したる結果、此かる文學的著作に近きものとなり了れるものかと想像せらる。趙翼が「明史事多文省、最爲簡密」(陔餘叢考卷十四)「近代諸史、自歐陽公五代史外、遼史簡略、宋史繁蕪、元史草率、

惟金史行文雅潔、敘事簡括、稍爲可觀、然未有如明史之完善者」（二十二史劄記卷三十一）といへるは、全く文學として見たる評語のみ、事實の精確を旨とする歷史上の記錄として論ぜるにはあらず。元史は實に明史と正反對なる意味に於いて價値あり、即ち文學の上よりは殆んと言ふに足らずとしても、此の中には無數の貴重なる史料が含まるゝを見るなり。而も其の史料は殆んど原形のまゝにて保存せらるゝを見るなり。顧炎武が「諸志皆案牘之文、並無鎔范、如河渠志言耿參政阿里尙書、祭祀志言田司徒郝參政、皆案牘中之稱謂也（日知錄卷二十六）といひて、體を爲さゞるを咎むれども、事實を傳ふる點より見れば、却て之を以て勝れりとすべし。此の如きは獨り諸志のみにあらず、本紀にも列傳にも、支那本部以外の地名人名等の或は二三樣の、甚しきは六七樣の文字を以て音譯せられたるが如き、普通の讀み本としては徒らに讀者を惑はすに過ぎざらんも、研究者の眼には、却て之によりて意外なる新事實を發見して得ることあり。蓋し此の如きは外國に駐在せるもの、出使せるもの、若くは出征せるものが、其親しく聞ける所に因て其人名地名を譯せることを示すものにして、比較して之を考察するときは、正しき當時の名を發見し得べければなり。若し外國の言語を知らぬ編纂者が、擅に其一を選びて悉く他を棄てしならんには、却て後世に誤を傳ふること多かりしならんに、知らぬことは知らぬとして、報告文のまゝ之を記載したるは、吾人研究者をして、恰も原文書を讀むが如き感あらしめて愉快極なし。例へば太祖本紀（一）に乃蠻部長を太陽罕とあるを、塔塔統阿傳（卷一百二十四）には大駁可汗とし、太祖本紀に博羅渾とあるを、本傳（卷百十九）には博爾忽とし、待薛禪傳（卷百十八）に惱木連（今の嫩河）とあるを、伯帖木兒傳（卷百三十一）には納兀河、洪萬傳（卷百五十四）には那兀江、王綽傳（卷百十六）には那江とし、世祖本紀（卷十五）に托吾兒河（今の嫩江の支流洮兒河）とあるを、孛禿傳（卷百十八）には塔兀兒河又

は塔兀河とし、特薛禪傳に龜剌兒河（今の洮兒河の支流圭勒爾河）とあるを、孛秃傳には曲列兒河、土土哈傳（卷百二十八）には貴烈河、伯帖木兒傳には貴列兒河、洪萬傳には貴列河とあり。以上は固有名詞に關する二三の例を出せるに過ぎざれども、重要なる事件に關する記事に就いても同樣なる例は勝へて數ふべからず。（是に於いて吾人は鄭麟趾の高麗史が高麗時代の朝鮮半島及び周圍の諸國の歷史研究者に與ふる非常なる利益と興味とは亦實に同樣の觀察點より來るものなることを附言せざるを得ず。）

陵餘叢考に於いて元史の舛謬をのみ指摘したる趙翼も、後には己れの偏見に氣付きけん、彼の名著二十二史劄記（卷二十九）には、元史の本づける十三朝實錄の貴重なりしことを想像し、元史の列傳諸志及順帝本紀等の大に據るに足るべきことを切論し、最後に「故一部全史數月成書、亦尚首尾完具、不得概以疎略議之也」といへるが如き、又元史は他の諸史と異なり、列傳にも詳に月日を記したることを例證して「此雖近於記功簿籍如李孟所謂謄寫吏牘者、然記事詳贍、使後世所考究、屬史裁之正、固不必以文筆馳聘見長也」と斷じたるが如き、聊か以て元史の爲めに辯じたるを多とすべし。（四庫全書提要卷四十六にも元史の長所をあげたり）

要するに、元史は文學上の著作としての價値は、他の諸史に劣ること明なれども、事實の眞を傳ふべき歷史上の著作としての價値は、寧ろ從來良書と評せられたる明史金史等にも勝れりとも劣れりとせず。然るに、從來元史に就いて言ふもの異口同音に其の瑕瑾をのみ擧げ、後進者をして、殆んど史書として信ずるに足らざるものと思はしめたり。就中、錢大昕の鴻儒を以てして、已に揭げし如き矯激の言を敢てしたるは、其人の爲めに深く惜むべきなり。そは兎に角、元代の歷史中、漠北時代に關しては西洋に傳はれる記錄も次第に發見せられ、秘文の原文も故那珂博士の大著成吉思汗實錄となりて已に世に行はれ

たれば、略ぼ開拓し得たりとせんも、中統建元以後に關しては元史を除きては、元史續編の順帝一代の記錄、輟耕錄山居新話等の隨筆物及び元典章等の法制に關するものゝ外に、元代諸家の文集の僅に存するあるのみ。善くも惡しくも、一篇の元史二百十卷を反覆精讀して細心に批判するに非ずんば、長へに其荆棘を披き難からん。邵遠平の元史類編、魏源の元史新編は體裁の上に於いて大に元史の面目を改めたれども、事實の詮議は、完全の域を距ること尙甚だ遠し、而して錢大昕の元史藁は未刊のまゝにて傳はざるものゝ如し。吾人は有志諸賢の此方面の開拓に當らんことを切望するの餘、敢て此愚文を草す。

（明治四十三年十二月二日）